躯幹に生じた脂腺癌

躯幹に生じた脂腺癌の1例

富澤 幸生* 小林 衣子*

Summary

A 65-year-old man visited the dermatology with complaint of a cutaneous nodule on his right chest for more than 20 years. Physical examination showed a 26×24mm sized, dome-shaped, firm, somewhat yellowish cutaneous nodule with fine telangiectasia. Microscopically, irregularly shaped tumor nests were present from just beneath of the epidermis to the deep subcutis. Palisading arrangement was not seen on the periphery of each lobules. The anaplasia of each cell was prominent and large round cells with foamy cytoplasm were intermingled with the tumor cell nests. The cytoplasm of the foamy cells was positive for Sudan III stain.

要 約

65歳の男性の前胸部に生じた脂腺癌の極めて稀な1例を報告した。40代のころから存在した同部の皮疹が数ヵ月前から増大し、腫瘤を形成した。病理組織学的に、表皮直下から皮下組織の深部にまで及ぶ腫瘍巣が認められ、個々の細胞は明らかな異形成を示した。腫瘍巣内に明るい細胞質をもつ泡沫状の細胞が散在し、この細胞は、Sudan III染色に陽性であった。電顕的に、腫瘍細胞内に lipid droplet、細胞間に microvilli と、不完全な腺腔形成が認められ、これらの所見と、他臓器に異常がみられなかったため、本症例を皮膚原発の脂腺癌と診断した。

症 例

患 者：65歳，男性

初 診：1992年8月6日

主 訴：前胸部の腫瘤。

既往歴・家族歴：特別なことはない。

現病歴：40代から前胸部の皮疹に気付いていたが、初診の数ヵ月前から急速に大きくなってきたため当科を受診した。

現 症：右前胸部の内側上方に、直経26×24 mm の、暗赤色でドーム状に隆起した、表面に毛細血管の拡張を伴い、一部血痂を附着し、黄色の色調が透見できる弾性硬の腫瘤がみられる(図1)。下床との可動性はなく、頸部および腋窩リンパ節は触知しない。

病理組織学的所見：病変は表皮直下から皮下組織の深部まで及んでおり、その大部分は、好塩基性に染まる小さな不規則な形状をした腫瘍小葉が集合して成り立っている。この小葉を形

* Kohki TOMIZAWA, Kinuko KOBAYASHI：札幌鉄道病院皮膚科

図 1. 胸部の結節

成する細胞は、核の大小不同が目立ち、細胞質が好酸性に染まる未分化な異型細胞からなっており、小葉辺縁に palisading arrangement はみられない(図 2)。また、腫瘍内のところどころ

図 2. 異型細胞の増殖

に泡沫状の細胞質をもった大型の細胞が散在している。この明るい細胞は、中央に星芒状の核を有し、細胞質に微細な好酸性の隔壁で隔たれた小室をもっており、脂腺細胞の特徴を備えている(図 3)。Sudan III染色において、これら泡沫状の細胞に一致して細胞質が黄橙色に染色され、脂肪の存在が証明された。

電顕所見：腫瘍細胞は表面に微絨毛を有し、隣接する細胞と不完全な腺腔を形成し、相互の細胞間にデスモゾーム様の構造がみられる。細胞内には多数の脂肪滴が存在する(図 4)。

治療および経過：以上の所見と、全身検索の結果、他の諸臓器に異常が認められないことか

図 3. 泡沫状の細胞の集合

図 4. 電顕微鏡写真

- * : 微絨毛を有する腺腔
- ▲ : デスモゾーム様構造
- ↑ : 細胞内空泡

ら、本症例を皮膚原発の脂腺癌と診断し、腫瘍の辺縁から 3 cm 離し、深さは大胸筋を含めて切除し、分層植皮を行った。その後、現在まで再発はみられない。

考 按

脂腺癌はまれな腫瘍で、発症頻度の報告は諸家により若干の差はあるものの、皮膚の全悪性腫瘍中 0.2~4.6% 程度であるという。発生部位は、多くは眼瞼のマイボーム腺由来であり、眼瞼外に発症する脂腺癌は調べ得た限りでは、これまでに本邦では 44 例の報告があるが、このうち 75% は頭頸部に発症したものであり、この部以外の脂腺癌の発症は海外の報告を含めても

表 1. Differential Diagnosis

sebaceous epithelioma (sebaceoma)
basal cell epithelioma with sebaceous differentiation
squamous cell carcinoma with hydropic swelling
clear cell sweat gland carcinoma
clear cell eccrine hidradenocarcinoma
balloon cell melanoma
skin metastasis from renal cell carcinoma
skin metastasis from Meibomian gland carcinoma
clear cell syringoma

極めて稀である^{2)~7)}。臨床的には、比較的急速に増大する黄色調を帯びた腫瘤としてとらえられることが多く、組織学的に、腫瘍細胞は一部に脂肪染色に陽性の脂腺細胞への分化を示す泡沫状の細胞を混じる未分化な細胞の集合からなり、個々の腫瘍小葉の辺縁に palisading arrangement はみられない。この未分化な細胞は、好酸性の細胞質をもち、核の大小不同が目立ち、異形成を示す⁸⁾。自験例は上記の組織学的特徴を備え、電顕的検索においても脂腺癌の所見に合致するものであり、かつ、全身精査の結果、他の諸臓器に異常がみられなかったため、本症を皮膚原発の脂腺癌と診断したが、躯幹に生じる脂腺癌の頻度は極めて低いものであるから、その診断に対しては、表 1 に挙げるような他の疾患との慎重な鑑別が必要であると考え⁹⁾。

文 献

- 1) Urban, F.H., Winkelmann, R.K.: Sebaceous Malignancy. Arch. Dermatol., 84: 113-122, 1961.
- 2) 桑原宏, 吉永愛子: 特異な経過と興味ある合併症を伴った脂腺癌(第1報). 皮膚臨床, 18: 335-343, 1976.
- 3) Oppenheim, A.R.: Sebaceous Carcinoma of the Penis. Arch. Dermatol., 117: 306-307, 1981.
- 4) Howard, D.K. Mark, A.S., Henry, A.K.: Sebaceous Carcinoma of the Foot. J. Am. Podiat. Assoc., 74: 120-124, 1984.
- 5) Wick, M.R., Goellner, J.R., Wolfe, J.T., et al.: Adexal carcinomas of the skin: II. Extraocular sebaceous carcinomas. Cancer, 56: 1163-1172, 1985.
- 6) Jacobs, D.M., Sandles, L.G., Leboit, P.E.: Sebaceous Carcinoma Arising from Bowen's Disease of the Vulva. Arch. Dermatol., 122: 1191-1193, 1986.
- 7) Kasdan, M.L., Stutts, J.T., Kassan, A.K., et al.: Sebaceous gland carcinoma of the finger. J. Hand Surg., 16A: 870-872, 1991.
- 8) Lever, W.F., Lever, G.S.: Histopathology of the Skin. 7th ed. J.B. Lippincott Company, Philadelphia, 1990, pp634-635.
- 9) Rulon, D.B., Helwig, E.B.: Cutaneous Sebaceous Neoplasms. Cancer, 33: 82-102, 1974.